シンポジウム

ポストコロナの時代と観光を考える
日高圏域から起こす観光とまちづくり

８月７日（日）御坊中央公民館で２０２２年度総会とシンポジウムを開催しました。日高圏域の観光とまちづくりを考えるシンポジウムは、研究所理事の鈴木裕範さん（和歌山大学客員教授）をコーディネーターに、パネラーに狩谷晃司さん（御坊市商工振興課観光係長）、辻井修さん（紀州体験交流ゆめ倶楽部副理事長）、橋本美奈さん（元由良町地域おこし協力隊）、御坊市の木戸地美也子さん（ウイズ・ア・スマイル会長）はコロナの影響で資料提供等での参加になりました。２回に分けて報告します。

（文責　大前事務局長）

鈴木：皆さん、こんにちは、鈴木です。新型コロナウイルスは、第７波に入って感染爆発が続き、和歌山県でも、日々、感染者数が過去最高を更新する状況にあります。コロナとともにある暮らしは、容易ではありません。しかし、私たちはコロナが突きつけている宿題を解いていかなければなりません。コロナ後の「ニューノーマル」とは？地域社会のコミュニティ、地域経済をどう作り直していくのか、様々な課題があります。これらは、日本の社会や和歌山県が抱えているコロナ以前の深刻な問題でもあります。

そこで、近年、起業やコミュニティづくりで若い世代の活躍が目立つ御坊・日高地域で市民の皆さんと一緒に、これからの観光と地域再生を考えていきたいと、シンポジウムを企画した次第です。

パネラーを御紹介します。手前から、御坊市商工振興課観光係長で地域づくり、観光振興に携わっている狩谷晃司さんです。そのお隣は、紀州体験交流ゆめ倶楽部の副理事長の辻井修さんです。辻井さんは、大阪で会社経営をしていて、18年前に印南町に移住をしてきました。外の目と内の目と、両方からのお話を期待しています。そのお隣の橋本美奈さんは、由良町の元地域おこし協力隊の隊員として、県外からやって来ました。３年間の任期中、由良町でまちづくりに参画して成果をあげ、協力隊の任期を終えたあとも、由良町に住み地域づくりに関わっています。４人目は、木戸地美也子さんです。木戸地さんは、御坊市の男女共同参画推進団体ウイズ・ア・スマイルの会長で、ふるさと御坊で女性が生きやすいまちづくり、コミュニティ活動に取り組んでいます。コロナの濃厚接触者ということで急きょご欠席です。発表資料をいただきましたので、司会の私が代理で発表させていただきます。貴重な実践を生声で聞けないのは残念ですが、ご了承ください。

シンポジウムは前半と後半の２部構成で、前半は、パネラーに報告をしてもらい、後半は、４つのテーマでクロストークにします。日高圏域におけるこれからの観光、まちづくりを考えていくヒントが見い出せたらいいと思います。

最初に狩谷さんからお願いします。

「一万人が１００回来る」御坊市の観光戦略

狩谷：御坊市の観光戦略について、「１００万人が１回来る御坊ではなく、１万人が１００回来る御坊」。５年ほど前のパンフレット、

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2022年 9月号
2022年8月25日発行　第341号　（月300円）

目　次

シンポジウム
ポストコロナの時代と観光を考える
日高圏域から起こす観光とまちづくり …… 1
和歌山県の農業構造の動向
2020年農林業センサスから …… 6
2022年度総会報告 …… 8

ＧＯ！ＧＯＢＯプロジェクトの中のキャッチフレーズで、リピーターを獲得していこうという事です。御坊市には白浜や高野山、熊野古道のような１日に何千人も来るような観光地はありません。その中で、「御坊っていいとこだよ、好きだな、また行ってみたい」、御坊に何度も足を運んでもらうリピーターを獲得する。そんな観光を目指すという事で取り組んできています。「１万人が１００回来る御坊」を実現するために、担当課では、４つの柱の考えを持っています。１つが、外からの意見を積極的に取り入れる。観光客の方の意見を積極的に取り入れていこうという事です。２つが、点ではなく面での観光、御坊市全体での取り組みにつなげていく。３つが、広域的に取り組む、日高はもちろんですが、和歌山県といった範囲に広げて、広域的に取り組む。４つが、市民に、観光資源や地域に愛着を持ってもらう。住んでいる方が、地域に愛着を持つ、観光地としても魅力的なものになると思います。具体的なプロジェクトを２つ紹介させていただきます。キャンピングカーと宮子姫の聖地化プロジェクトです。このプロジェクトも４つの柱をポイントにしています。

狩谷晃司さん

キャンピングカーの聖地化プロジェクト

１つ目がキャンピングカーの聖地化プロジェクトで、高速を降りてすぐの日高川河川敷に野口キャンプ場があります。キャンピングカーの聖地として売り出していますが、当初は、このキャンプ場をどう売り込んでいくか試行錯誤でした。野口キャンプ場は、道路からも街からも近くて、川の下流にあって、キャンプにイメージする、山の中、虫取り、川釣りという場所でなくてもお客さんが来るのかと思いました。転機は、キャンピングカーオーナー達のクラブのオフ会がここで開催された事です。突然、百何十台というキャンピングカーが集結して私達も驚き現場でいろいろヒアリングさせてもらいました。そこで分かったのですが、高速道路から近い、街中が近くで買物しやすい、広くフラットな地面とか、そういうキャンプ場がキャンピングカーにとって魅力的だという事です。キャンプ場の区画は、普通80平米ぐらいですが、野口キャンプ場は２００平米以上あって、ゆったりできます。今年５月のオフ会には、大型バスのような大きな車も来ていました。元々キャンピングカーの人たちはお金持ちで、私達のニーズとは違うことが多々あります。ペットを旅行へ連れて行くためにキャンピングカーを買う方も多いと教えていただきました。ユーザーにいろいろ聞いて、ドッグランを整備したり、電源を30アンペアと大きくしたり、キャンピングカーのトイレの汚物を捨てるダンプステーションとか、施設整備も進めています。今日配っているパンフには市内の地図を載せて、キャンプ場を拠点に街中へ出かけてもらう事を目的としています。例えば駐車場の台数や、動物病院を載せたり、ニーズに応える感じでつくっています。プロモーションでは、ユーチューブを積極的に活用しています。キャンピングカーはそこまで大きくないマーケットで、動画を見てくれる方が多く、「キャンピングカーの聖地」と上げていただいています。大阪の関西最大のキャンピングカーショーにＰＲに行きましたが、ほとんどのお客さんが野口キャンプ場を知っていて、関西では知られた場所になっています。

利用者ですが、１９９７年にオープンして、ずっと年間２０００人ぐらいで推移していたのが、ここ５年で急増。２０１７年に２２５９人、18年は５６０４人、19年１万60人と倍々で推移して、20年と21年はコロナで閉鎖期間があったので少し減りましたが、今年は２万人も見込める推移となって、盛り上がっていると思います。

宮子姫の聖地化プロジェクト

続いて二つ目が宮子姫の聖地化プロジェクトですが、こちらは今後押し進めていきたい事業です。宮子姫のストーリーを紹介しますと、御坊市の九海士（くあま）の里というところで、ある夫婦が娘を授かりました。でもその子に髪が生えてこなかったのです。母親が、海から拾いあげた黄金の観音様に、髪が生えるように毎日お願いしていると、宮子に美しい髪が生えてきました。宮子が年頃になると髪長姫と呼ばれるきれいな女性になり、その髪をあるとき、ツバメが奈良の都の藤原不比等の宮殿まで運んで、それが不比等の目にとまり養女として迎えられ、文武天皇の后となって聖武天皇をお産みになったという。その観音様への恩を宮子は忘れてなくて、それを祭るために道成寺を建立したというのがストーリーになっています。なかなか魅力的なストーリーだと個人的にも思います。御坊市では宮子姫を地域資源に様々な取り組みをしてきました。宮子姫みなとフェスタで、宮子姫にふんした女性と時代行列を行ったり、美人の里探遊と宮子姫を全面に出したパンフレットをつくっています。体験観光等では、宮子姫をモチーフにした蕎麦や、御坊の花のスターチスの髪飾りづくりを行いましたが、観光に結びつく状況にはなっていません。今後のプロジェクトとして、宮子姫伝説のスポットの整備、吉田八幡神社、道成寺、それから、道成寺の木材を運ぶときに川で亡くなった紀道成を祭る紀道神社。道成寺と紀道神社は日高川町で、行政区がまたがって連携がうまくできていなかったので、行政区を越えたプロジェクトチームに向けて準備をしている状況です。また、市民から愛される宮子姫にしていこうと「みーやちゃん」というゆるキャラ、この子が積極的に御坊市のイベントや、ＳＮＳなどで露出を増やして、みんなが宮子姫の話を知って、宮子姫が自慢になる土台作りを行っています。ほかにもぬいぐるみや塗り絵コンテストで「みーやちゃん」が市民の中に浸透しているところです。キャンプ場も光の当て方で劇的に変わりました。地域資源の魅力をいろんな人に意見を聞きながら、光の当て方を探っていけば、御坊市の観光も良くなっていくと思っています。

鈴木：狩谷さん、ありがとうございました。御坊市２つの聖地化プロジェクトというのがポイントで

した。御坊市で生まれた宮子姫だけではなくて、関連するところの、ポイントを結びながら、宮子姫を広域的な形で観光資源として活用しようという事。また、キャンピングカーは大変注目する話です。このコロナの中で、全国的にキャンプが注目され、キャンプ場の誘致合戦、こういうものが今後、更に活発になると思います。御坊はいち早く取り入れて、今後どう発展させるのか注目しています。それでは次に、辻井さんよろしくお願いします。ゆめ倶楽部の観光戦略、これは日高郡全体の教育旅行、体験旅行に取り組む計画が進行中なわけですが。目指す、観光日高のこれからというところで、お話をしてもらえたらと思います。

日高郡全体で教育旅行の受け皿に

辻井修さん

辻井：辻井と申します。紹介のところで触れられましたが、私は大阪から18年前にこちらにIターンしてきて、農業を始めて、それから平成23年から農家民泊を始めました。この地域で農家民泊は20年ぐらい前に旧中津村から始まり、日高川町が先見的に、民泊だけでなく農業体験、林業体験などを含めて、教育旅行を受ける団体「ゆめ倶楽部21」を作っていました。それを倣う形で印南町でも、「いなみかえるの宿」という団体をつくり、平成23年に農家民泊を始め、私も参加しました。今、私がやっている紀州体験交流ゆめ倶楽部は、去年４月に発足しました。この団体は、「ゆめ倶楽部21」と「いなみかえるの宿」を合体させ、日高郡全体で、農家民泊と体験交流を進めていこうと日高振興局の方に声をかけていただいて発足しました。私は「いなみかえるの宿」の会長をしていて、合流時に、ゆめクラブの副理事長になりました。

和歌山県に教育旅行誘致協議会があります。各市町村にも誘致協議会があって、農家民泊を中心に教育旅行を受けてきました。コロナが始まる前、17年、18年、この辺りから教育旅行のオファーが増え、とりわけインバウンド、たくさん海外の方が観光に来られて、旅館やホテルでは間に合わないということで、民泊が生まれてきました。私たちの農家民泊も海外からもたくさんお客さんが来るようになりました。印南町でも、国内の子どもさんよりも、海外の子どもさんを受けることが多く、大体８割方、台湾、マレーシア、それから中国から来られました。インバウンドで来られる子どもたちは高校生が多かったですね。例えばマレーシアのフリアマンという女子高校が７年間毎年来ていました。僕は全く英語ができませんが、スマホやポケトークで通訳できるので、言葉の問題では不自由はありません。それと、マレーシアも台湾も日本に興味を持って、将来、日本の大学への留学や企業に勤めたいという方が結構います。日本に来る子は、お父さん、お母さんが高学歴で、しかも裕福な家庭の子がほとんどでした。日本に興味を持って来ているので、日本のことを知りたい、普通の家庭の生活に興味があるので、話がすごく弾むのです。逆に日本の子どもたちは、先生や親に言われて来ているので、10回話しかけても３回ほどしか話が返ってこない。僕は、海外の子どもの方が好きでした。話が進むのでね。もちろん今の日本の子どもたちは、コミュニケーション能力が非常に落ちているということがあるのです。

生活体験を積ませる農家民泊

今の子どもさんは他人の家に泊まったことがない。精々祖父母の家に１年に１回ぐらい泊まるぐらいで、僕は75歳ですが、僕たち子どもの頃は、祖父母の家にしょっちゅう泊まりに行って、いとこ同士で遊びました。他人のうちに泊まることもありました。ところが今の子どもさんにはそういう経験がないのですよ。だから、生活体験の中から生まれるようなコミュニケーション力を付ける機会が少ないのです。そういう中でコミュニケーション力を付けるために、３泊４日の修学旅行の内１泊は民泊を入れてほしいと要望が必ずあるのです。大きな意味で観光が、見る観光から体験する観光に切り替わってきています。海外旅行も国内旅行もそうです。観光会社が組んだツアーの中にも民泊を１回入れるというのが主流になってきています。もちろん、コロナの状況の中で、それは一旦途絶えて、僕たちも、この２年間、民泊を１回もしていません。今年になってようやく復活の兆しが出てきたところです。シンポジウムの中で話が進んでいくと思うのですが、観光自身が大きく変わってきていて、その中で農家民泊についてですが、ＳＤＧｓの関係において非常に重視されています。例えば去年の日経新聞で一面を使ったＳＤＧｓの取り組みのＣＭがあったのですが、その中に、農家に泊まろうという項目が入っていたのです。私たちは今、教育旅行が中心ですが、観光旅行全体が民泊に力を入れるような時代になってきている。僕は、将来的には大人も含めて泊められるような状態をつくりたいと思っています。日高郡は中紀で、関空から１時間で来られます。観光地の白浜や、熊野に行くにも割と便利で、地理的に有利な地域です。今まで残念ながら受け入れる僕たちのパイが小さすぎたので、何とか軒数を増やせないかと３年前ぐらいから議論をして、去年、日高郡全体で１本化したわけです。コロナで止まっているというのが現状で、ポストコロナという言葉になっていますが、僕は、コロナはなくならないと思います。だけど状況は変わっていく、元には戻らないけども、状況は変わるはずです。そして観光における民泊の位置もますます強くなっていくと思います。将来必ずものにできる。宿泊できるキャパを増やしたいということで、今努力をしている最中です。

鈴木：辻井さん、ありがとうございました。教育旅行、それから民泊の中で見えてくる、日本の子どもたちの状況、海外の子どもたちの指向、こういったこともなかなか興味深く聞かせてもらいました。コミュニケーション能力が今の子どもたちが落ちている、その背景にあるのは生活体験がないからだというのは、重要な指摘だったかと思いました。もう１点ですけども、和歌山県内の農家数、２０１０年に３万３７９９戸あったのが10年後の２０２０年には２万５２

６３戸、10年間で25パーセント減っています。農家が減って更に高齢化が進んでいる。こういったことも合わせて、この農家民泊をこれから観光の柱に据えていく場合に、この辺の問題もどう考えていくのかのポイントの１つと思いながら、今の報告はお聞きしました。では次、橋本さんよろしくお願いします。

ばーと広がる景色に魅せられて由良町に

橋本美奈さん

橋本：由良町で地域おこし協力隊を３年間させていただいて、その経験からこれからの観光はどうなっていくのか、簡単に報告させていただきたいと思います。出身は大阪の枚方市で、５年ほど前に移住してきました。街中に過ごしていたので、街には流行が常に目の前にある所でした。大学を卒業した後は、社会人として、アパレル業界や営業代行の仕事をしていました。土日も仕事を家に持って帰る、いわゆるブラック企業みたいなところで、流行に流される、自分の時間はないということに疑問を持ちました。その時に、古民家で田舎暮らしを始めた友達がいて、そこで田舎暮らし体験をしました。自然の中で生きることを感じるのは、人間としてすばらしいと、回帰のような体験をさせてもらいました。土日も都会のカフェにパソコンを持ち込んで仕事をしていたのですが、その形態を由良町に移して、２時間かけて由良町の衣奈のカフェに来て、きれいな海の近くで仕事をして、また２時間かけて帰る、今よくあるテレワークのような形で１年ぐらい由良町と関わりを持っていました。そのとき、30才になる前だったのですが、このままの生活でいいのかと思うことがあって、由良町で地域おこし協力隊を募集する話を頂いたので、ここしかないだろうと思い由良町に来ました。何で移住したのか聞かれるのですが、由良町の衣奈のトンネルから海に降りていくと、ば～と景色が広がる瞬間があって初めて来たときに、住みたいと思いました。この第一印象ってすごく大きいと思っています。地域おこし協力隊で私が何をしていたかというと、フリーミッション型と呼ばれるものでした。由良町の観光業と産業を盛り上げてくださいという内容で、東京にある和歌山のアンテナショップに試食販売に行ったり、御坊に飛鳥Ⅱが来たときの出店だったり、漁船で子どもたちと魚に餌をあげる企画に参加したり、山の畑でモノラックの写真を撮ったりとか経験させてもらいました。このポテンシャルは、都会には一切転がっていない、見つけられないことです。協力隊時代は主にＳＮＳ、フェイスブックやインスタグラムに情報発信をしていました。それ以外にも観光をどうしていくかという地域づくりの協議会や観光ＰＲ動画に参加したり、自主的にゲリラ清掃などもしました。観光で人が増えるとゴミ問題が確実についてくるので、観光地などを先に奇麗に掃除する企画をして、もう一人の協力隊員の方とやっていました。ツイッターで全国の地域おこし協力隊の方などに拡散して、同じ日にゲリラ清掃しようぜみたいな形でつながりながら、ゴミ拾いを楽しむ企画をしました。１回のゴミ拾いで３袋から５袋ぐらい朝の１時間で拾うのですが、３、４か月すると、１袋か２袋に減るのです。道のゴミを拾い続けると捨てる人も減ると実感しました。今は協力隊員の後輩が４名いるので、彼らにも引き継いでほしいと話をしています。

観光、人がどういう理由でここに来るか

地域を盛り上げる企画では、ひまわり企画というのを最初にしました。耕作放棄地をどうやって活用するかという企画で、耕作放棄地にひまわりが咲いていたら、綺麗だし人が来てくれる。また、耕作者を募集していることも知らせて、次の年にそこを使ってもらえる。各方面に電話をして、農家の協力で、２０１９年の夏に１反ほどのひまわり畑をつくりました。ひまわりの成長をＳＮＳで発信して、和歌山で写真を撮りたい賛同者と一緒にイベントを企画して、それをハッシュタグ、＃由良町、＃ひまわり畑などとＳＮＳ上で発信してもらう流れで戦略を練って、その年の夏終わりには由良町の役場に、「由良町のひまわり畑ってどこにあるの」という電話が来るほど話題になりました。この企画にかかった費用は、人件費を除いて種代３０００円ぐらいなのです。それで由良町をアピールできたのは、使えた戦略だったと思います。その後、美浜、日高と由良の３町連携事業で取り組んで、次の年にひまわり畑が３カ所に、日高広域の教育観光協議会で２カ所増えて、今年度新たに由良町畑地区に出来て全部で６カ所に増えています。最初は、私が遊んでいる感じだったのが、戦略と軸みたいなものをぶらさなければ、いいなと思ってくれる企画だったと思います。もう１つ、これは映像の企画で、ゆら早生のＣＭを15秒でつくってほしいとＪＡ紀州さんの要請で作ったものです。これは、元々、東京に消費宣伝活動でみかんを売りに行く事業があって、コロナ禍で行けなくなり、みかんの販売促進を図る動画をつくりだしました。ゆら早生に関してのＰＲ動画は、２０１８年から続けていて、ユーチューブでゆら早生と検索すると動画が上がるので見てもらえたらと思います。例を２つ挙げたのですが、これからの観光というところで、その切り口は、１つが耕作放棄地で、２つが消費宣伝、それが最終的に観光につながってくると私は感じていて、観光、人がどういう理由でここに来るかという演出であったり、戦略というのがすごく重要になってくると思います。耕作放棄地の有効活用できないか、宣伝活動ができずにどうしようという課題から、観光にどうつなげていくかという戦略だと思います。

今日お配りしているパンフ「紀州巡り旅」の表紙に私が写っています。これは、ゆら早生のＰＲで、擬人化するというテーマになったＣＭです。ゆら早生は外見が黄緑で、酸っぱいというイメージが付くので、中はオレンジでおいしいとアピールする。オレンジのワンピースを着て、外が緑のショール。ゆら早生のコスプレをしています。この話は動画のためにセッティングですが、こうした話をすると、ゆら早生は緑だけどおいしい、食べてみようとなると思っています。

鈴木：最後に話をしてくれたゆら早生にしても、和歌山県民ですら由良で誕生した柑橘だと知らない人は結構いると思うのですね。地元の人間でも知らないっていうことが、やっぱりままあるだろうと、その事は地域づくりや観光を考えていく上で大事なことだと思います。初めの２点、僕が気の付いたところをメモしたので話しますと、どういう理由で観光客がここに来ているのかということの、ニーズの把握が大事だということ、もう１つ、戦略の根本的なところさえ外さなければ支持されるのだということ。いろいろなことを展開する基礎になるかと思います。それで僕が思うのは多分、年齢が上の世代になると、そういうチャレンジしようとすることがどうしても、奥手だったりするのかなと思うのです。そこはある意味、若い人の特権で、そういう若い人を生かせるような、コミュニティが、地域にあるかどうかが大事なのだろうと思いながら話を聞かせていただきました。

最後に、木戸地さんの報告ですが、冒頭お話したように残念ですが参加できません。私が今日、代役をします。（※記事は後日、ご本人に書いていただきました）

木戸地美也子さん

木戸地：私は「まちづくりは人づくり」というタイトルで①まちづくり②コミュニティ③繋がり観光④関係人口の順番でお話します。まず自己紹介と活動の経緯について。

木戸地美也子（38）独身時代から国内外の地域活動に参加した経験から地元御坊市で子育てをすることを決意してから地域を意識し始めました。

２０１６年に夫、木戸地直紀（38）は大阪や兵庫、イタリアのフィレンツェで料理修業の後にイタリアン食堂「アルベロ」を開業しました。私は取り壊す予定の古民家を借りることができたことから住み開きコミュニティを始め、私たち夫婦にとってターニングポイントの年になりました。振り返ると、夫は日々の努力や地域交流が評価され、２０２１年に地域に愛される店としてミシュランガイドブックで紹介していただきました。私は地域の人・コト・状況を知るために、ジャンルが様々なサークルやイベントや講座、集会に参加したり所属したり開催したりを繰り返し３００件ほど関わらせていただきました。２０１９年に読売新聞が主催する読売子育て応援団大賞でママ友をゆるーく繋ぐことが評価され奨励賞を受賞し、２０２０年から、御坊市男女共同参画推進グループ「ウイズ・ア・スマイル」の会長を務めています。現在も夫婦、別の舞台ではありますが、切磋琢磨しています。

人づくりの３箇条

さて本題の①まちづくりについて。まちづくりに必ず必要な人！人づくりをすることでまちづくりができると考えています。私が考える人づくりの３つの基本は、①積極的に関わっていくこと。人が関わっていくことで、人は責任感が生まれ、成長していきます。コミュニケーションをとることで、ブラシュアップされ、発展していきます。②認め合うこと。価値観感が違う者同士が認め合い、自己他己肯定をしていきます。③信用信頼を築いていくこと。今も昔もお金を稼ぐ前に信用信頼を稼げといいます。今日もまさに関係性があるところに仕事は転がります。これは人が成長して自立していくパターンで人づくり３箇条にしています。

「助けて」と言える関係づくり

②コミュニティについて。コミュニティとは、共通目標と信頼関係からなる集団と検索するとでてきます。私もコミュニティビルダーとして、コミュニティの立ち上げや、問題解決に取り組んできました。大切なポイントは「ちょっと醤油かして」「はいよ！」の関係づくりができるかどうか。困ったときに、助けてと言える人は何人いるでしょうか。助けてと言われることはあるでしょうか。この関係がこの町の暮らしに愛着を作ることに繋がっていくと考えています。私は、初期の子育て時代に毎週のように持ち寄り食事会をしていました。１００人以上のママさんと子どもたちと食事をした気がします。「子育てを楽しみたい」ママさんが集まってきました。食事をしながら、悩みや愚痴、将来のやりたいこと、笑い話なんでもをシェアしました。今もみんなゆるーく繋がっていて、困ったときは電話をするし、してきてくれます。この頃から、私もこの町と向き合い始めたと思います。出身地も学校も年齢も価値観も全然違うみんなの共通目標は「子育てを楽しみたい」でした。未来のための平和なコミュニティです。

一人ひとりができるまちづくり

③繋がり観光について。おもてなし観光は知り合いの人が来たら、おもてなしをしながら観光することです。繋がり観光は、おもてなし観光に加えてお互いの活動や仕事で繋がれることやこれからのタイアップできることを話しするためにお互いの地域を訪問し合うことです。（おもてなし観光も繋がり観光も私の言葉になります。）現在は、オンライン上で出会うことも多くあり、こういう観光パターンもでてきています。その時に、まちづくり活動をしていたりコミュニティをもっていたりすると繋がりやすいです。もう一つは、大学さんと繋がることが多く、案内係や関係者になることができます。

④最後に関係人口について。これまでの話を振り返ると結果的に関係人口を増やすことができると考えます。関係人口を作りながら活動や仕事を発展させて、暮らしのためのコミュニティ再構築を考えることは私たち一人ひとりができるまちづくりとまとめさせていただきます。

鈴木：４人の方がどのような活動をしているか、観光、まちづくり、コミュニティなどに、どんなようなお考えを持っているか、感じ取ってもらえたと思います。今のお話の中でも、こちらの日高圏域の地域の特性とか、個性とか、あるいは課題や可能性が、見えてきたような、そんなような気がするのですが、後半で深めていければと思います。

（次号につづく）

和歌山県の農業構造の動向
2020年農林業センサスから

８月21日、田辺ビッグ・ユーで開催された和歌山大学南紀熊野サテライトオープンセミナーの岸上光克教授「アグリビジネス論」『最新、日本農業構造の動向～２０２０年度農業センサスと令和３年度白書より～』を聞かせていただいて農業センサスの和歌山県のデーターを見てみました。

農林業センサスは、農林業の生産や就業構造、農山村の土地利用などの実態と変化を明らかにし、農林業政策の基礎資料のため、５年ごと行われる調査で、２０２０年２月に調査され、農林水産省のＨＰで公表しています。

セミナーで岸上教授は、日本の農業は、瀬戸際の状態。今回の調査で、５年前に比べ農家数は22％減少。しかも調査ごとに減少幅が増加している。５年前調査で大きく増加した法人経営体も増加幅が減少。農業従事者の平均年齢は65才で、65歳以上の従事者が７割近くを占める。後継者がいる農家が３割に満たず、耕作放棄地が増加し続けている。経営体、農地、労働力の３指標はすべて減少幅が増大している。

農業の状況を把握するには、いろいろな指標があるが、一番分かり易いのが、農業従事者の平均年齢だというお話でした。

県のセンサス結果概要から

和歌山県が出しているセンサスの結果概要も確認しました。

・農家数（**表１**）は17％の減少、５年前は12％の減少ですから調査毎に増加しています。

・主な生産物と推移は（**表２**）では、和歌山は柑橘、うめ、柿など果樹類が突出していて65％を占めます。

推移では、稲作の減少の他、花き・花木の減少も目立ちます。

・年齢別従事者（**表３**）では、農業従事者の主力は、65歳以上で、15年センサスでは65歳以上60％から20年には64％と着実に上昇しています。

表１．農林業経営体数
＜2020年農林業センサス和歌山県の結果概要（抜粋）より＞

区　分	農業経営体	林業経営体	合　計
2010年	24,316	2,650	26,966
2015年	21,496	1,240	22,736
2020年	18,141	340	18,481
増減率 (%)			
2015年／2010年	△11.6	△53.2	△14.3
2020年／2015年	△16.9	△72.6	△16.9

市町村別の平均年齢と主な生産物

県内市町村別の農業従事者の平均年齢、主な農業生産物を見ると、和歌山の状況がリアルになってくるかと思います。

従事者の県平均の年齢は、67歳ですが比較的若い所は、有田地方と日高地方、田辺市、みかんとうめ、野菜、花き花木の産地になっています。その一方、柿の産地の伊都地方の平均年齢が高くなっています。

農家数が多いトップ３は、「紀の川市」「有田川町」「田辺市」ですが、すさみ町以南の町村では、極端に減ってしまい、従事者の年齢も高くなります。昨年田辺市本宮、龍神、中辺路で懇談会を行いましたが、その全てで農業はもうないと言われたのがよくわかります。

表２．農産物販売金額１位の部門別経営体数　＜2020年農林業センサス和歌山県の結果概要（抜粋）より＞

区　分	計	稲　作	露地野菜	施設野菜	果樹類	花き・花木	その他
2010年	23,103	5,035	1,253	1,003	14,220	1,014	580
2015年	20,278	4,167	1,150	859	12,842	814	446
2020年	17,183	3,253	996	758	11,244	594	338
増減率 (%)							
2015年／2010年	△12.2	△17.2	△8.2	△14.4	△9.7	△19.7	△23.1
2020年／2015年	△15.3	△21.9	△13.4	△11.8	△12.4	△27.0	△24.2
2020年構成比 (%)	100	18.9	5.8	4.4	65.4	3.5	2.0

表３．年齢別基幹的農業従事者数　＜2020年農林業センサス和歌山県の結果概要（抜粋）より＞

区　分	計	年齢階層別						
		15～24歳	25～34歳	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75歳以上
2015年	33,268	144	828	1,768	3,273	7,570	10,731	8,954
2020年	27,202	92	587	1,503	2,407	5,219	9,747	7,647
増減率 (%)								
2020年／2015年	△18.2	△36.1	△29.1	△15.0	△26.5	△31.1	△9.2	△14.6
2015年構成比 (%)	100	0.4	2.5	5.3	9.8	22.8	32.3	26.9
2020年	100	0.3	2.2	5.5	8.8	19.2	35.8	28.1

○県内市町村別従事者平均年齢／販売金額１位の部門別経営体数

市区町村	基幹的農業従事者（男女平均）	計	稲　作	露地野菜	施設野菜	果 樹 類	花き・花木	その他
和歌山市	68.1	1,665	1,097	280	87	172	8	21
海南市	66.9	1,089	157	24	14	863	21	10
紀美野町	70.6	301	42	9	3	188	5	54
橋本市	70.6	849	230	51	15	530	12	11
かつらぎ町	68.2	944	66	29	33	794	12	10
九度山町	69.4	261	2	2	1	253	2	1
高野町	70.0	21	13	3	1	-	2	2
紀の川市	67.8	2,604	394	172	128	1,785	99	26
岩出市	69.6	315	237	31	9	29	8	1
有田市	65.9	826	6	4	3	803	5	5
湯浅町	60.8	308	2	-	4	299	2	1
広川町	63.7	300	25	1	9	246	17	2
有田川町	66.2	1,738	64	15	18	1,486	43	112
御坊市	63.8	511	146	79	95	52	131	8
美浜町	68.5	88	46	11	22	3	5	1
日高町	71.0	283	181	39	34	17	10	2
由良町	67.5	164	21	15	1	121	5	1
印南町	63.9	606	47	83	165	227	83	1
みなべ町	62.3	1,242	1	13	37	1,187	2	2
日高川町	68.5	559	86	54	54	329	27	9
田辺市	64.8	1,698	61	24	9	1,548	40	16
白浜町	69.4	214	123	16	3	44	17	11
上富田町	66.3	255	52	13	3	182	5	0
すさみ町	69.4	49	30	3	-	8	5	3
新宮市	71.5	58	40	4	2	4	1	7
那智勝浦町	66.8	86	44	13	8	12	-	9
太地町	73.2	6	-	-	-	6	-	0
古座川町	68.2	67	17	3	-	30	14	3
北山村	72.0	4	1	-	-	3	-	0
串本町	71.9	72	22	5	-	23	13	9
県平均／合計	66.5	17,183	3,253	996	758	11,244	594	338

第12回わかやま住民要求研究集会のご案内

日時　2022年10月８日（土）10時～16時

場所　和歌山県勤労福祉会館プラザホープ

参加費　1,000円

分科会
第１分科会　子育て・教育
第２分解会　医療・福祉・介護
第３分科会　産業・経済・町づくり
第４分科会　農林水産業

2022年度総会報告

8月7日（日）御坊中央公民館で開催された総会は、新型コロナウイルス第7波の感染が広がる中、感染防止に配慮しながら、午前11時から行いました。濃厚接触者に該当するなど参加できない方もいて21名（シンポ35名）の参加になりました。

阪辻博文氏の司会で、冒頭7月20日に67才で亡くなった前事務局長の西岡敏氏への黙とうを行いました。

議長に、柳田孝二氏を選出し、杉谷副理事長のあいさつの後、活動報告、会計報告、監査報告、いずれも原案どおり承認されました。

活動方針案では、「地方自治の担い手を育てる」という事で、自治体職場での自治研活動や職員の意識を高める学習会等の取り組みを進める。

「まち研」確立に向けて、ブロック交流会から各地の研究会や学習会への援助等研究所とし次のステップに向けた取り組みを模索する。

ＩＴ推進ではＳＮＳによる情報発信を検討する。

第12回わかやま住民要求研究集会が10月8日（土）プラザホープで開催され、参加呼びかけ等の取り組みを進める。

役員では、顧問の西村純一氏が病気を理由に退任されましたが、他の役員は全員留任で承認されました。

参加者から由良町の興国寺の歴史学習会「天狗が立てた寺」の紹介。田辺市合併懇談会の今後の取り組みについてなどの発言がありました。

理事長	大泉　英次
副理事長	九鬼　堅
〃	杉谷　尚
常務理事	大前　和久
〃	鈴木　裕範
〃	根来　修一
理事	楠本　文郎
〃	吉田　直樹
〃	尾崎　昌樹
〃	柳田　孝二
〃	山下　紀和
〃	石田　文雄
〃	宮井　健次
〃	増谷　憲
〃	広畑　敏雄
〃	西　良人
〃	阪辻　博文
〃	井本　有一
〃	上田　弘志
団体理事	窪田　憲志
〃	仲江　玄
〃	河村　好輝
〃	中野　浩明
〃	石原　徹
監事	西　均
〃	伊藤　一三
事務局	
事務局長	大前　和久
まち研担当	鈴木　裕範
事務局	根来　修一
〃	柳田　孝二
〃	阪辻　博文

追悼　西岡敏さん

敏さん安らかにお休みください。でもちょっと早すぎましたね。

西岡敏さん、自治労連運動、自治研活動とご苦労様でした。

私たちの運動のスローガンは「地域住民の繁栄なくして自治体労働者の幸せはない」を合言葉にしていました。賃金労働条件は勿論ですが、住民全体の奉仕者として、国や自治体が押し付けてくる住民いじめの仕事に対しては、住民本位の仕事に改善することを大きな目標としました。

敏さんは、自治研活動を県下の中でも特に熱心に取り組む一人でした。私たちは「ミスター自治研」と呼びました。御坊市職で取り組まれた本町商店街の活性化のための懇談会、聞き取り調査、そして当局への提言。さらに組合員自らも「買い物は地元で」との思いに繋がる運動になりました。今も記憶に残っています。地元からは組合への賞賛の声が寄せられたと聞きました。

２０１７年６月、そんな経験と力を自治体問題研究所の事務局長にとお願いすることになりました。残念ながら２０２２年７月病魔との闘いの末ご逝去されました。

コロナ禍の状況の中で、仲間のお見送りも難しい中でしたが、物静かで誠実な敏さんの人柄は皆んなの心に永遠に存在し続けます。

２０２２年８月　元事務局長　九鬼　堅

2019年総会で西岡事務局長